

第7章 グローカル視点の大学教養科目としての地域史・日本史授業 —「歴史総合」を受けて—

大日方 克己

1. はじめに — 大学教養科目としての歴史系授業の課題

学習指導要領の改定により 2022 年度から高等学校の歴史の科目が「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」になった。2025 年度からこれらを学んだ学生たちが大学に入学してきた。「歴史総合」や探究科目をふまえて、大学ではどのような歴史を学んでもらうべきか、方法論を含めて課題となっている。

歴史学を専門として学ぶ課程では、実習、演習、卒論等を通じて「探究」は自明のことであり、ことさらに取り上げるまでもないのかもしれない。問題は、歴史学を専門としない学生たちにどのような歴史の学び、歴史に対する関心と思考をつちかってもらうかにある。言い換えれば、何のために、どのような歴史を学び、考えてもらうかである。

根拠のない言説、陰謀論、歴史的事実に謙虚に向き合わず都合のよいことだけをつなぎ合わせた歴史観、都合の悪い歴史的事実を「捏造」として排撃するなど、これまで積み上げられてきた歴史学やその成果、歴史的事実が無視され、否定され、そしてそれらが政治利用される状況にある。これは筆者が改めて指摘するまでもないだろう。

そのような状況のなかで、大学における歴史の学びの役割は大きい。歴史を専門としない多様な学生にどのような歴史をどのようにして学んでもらうか。課題を立て解答を導き出すための方法、思考方法、とりわけ歴史学の根幹でもある史料批判（情報の真偽や的確性、情報の性格の判断力にもなる）、根拠ある論理展開を学び身につけ、市民として社会に出て行ってもらうことが重要であろう。そしてグローバル化と脱グローバル化、自国第一主義のせめぎあう現在の社会のなかで、その課題と解決を模索してもらうような学びが必要なのではないかと考える。

一方で、足元から史資料が消える、改ざんされる、歴史が消えていくという現状の中で、歴史を専門としない市民の中に、一人でも多く、そのような現状と課題を認識し、歴史を担う人々を増やしていくことも、大学での歴史の学びとして重要なことであろう。

また島根大学のような地方大学の場合、地域とのかかわりをどう持つか、学生教育においては、地域の課題を発見し、解決するような問題関心や能力をつちかうことも重要なポイントになっている。

「歴史総合」は日本史、世界史の枠にとらわれず、近現代を中心にグローバルな視野で歴史を考えるものである。筆者が教養科目として担当してきたのは「山陰の歴史—古代中世」であるが、これをグローバルな視野のなかで展開していくことが、「歴史総合」の学びを大学のなかで展開させ、地域の課題にも対応するものになると考えた。グローバルとローカルを結びつけて考える、グローバルな歴史観と思考構築の試みである。

近現代史であれば、グローバルな歴史像は比較的容易に構築できるかもしれない。前近代史となると至難なことは否めない。特にミクロな地域を設定した場合、日本、日本列島という視野は持ちえても、東アジア的視野を持つのが難しいことは少なくない。山陰地域の場合は、幸いにも渤海使の来着、朝鮮との交流、石見銀山などの素材がある。これらを軸にグローバルな前近代の地域の歴史を授業で組み立てることは可能だと考えられる。とはいえ史料の制約があり、地域住人の目線、認識で世界を見通すことは難しい。

本稿はこうした試行錯誤のグローバルな教養科目「山陰の歴史—古代・中世—」の内容の概略を報告するものである。筆者は2022年度で島根大学を定年退職したが、引き続き非常勤講師として「山陰の歴史—古代・中世—」を担当する機会を与えていただいた。それも2024年度で終了した。「歴史総合」を学んだ学生の入学前に試行錯誤のままで終わってしまった感があるが、本共同研究の終了にあわせて総括ともさせていただきたい。

授業は14回構成で、最終年度は以下の通り。

- (1) 「出雲」はいつからあるか—地域を考える—
- (2) 『出雲国風土記』から何がわかるか—『出雲国風土記』と古代の社会—
- (3) 国府の役人は何をしていたか—出雲国府にみる—
- (4) 「出雲神話」とは何か—古代王権神話と出雲—
- (5) 「出雲神話」はどのように変化したか—神話は変わり、神話は創られ続ける—
- (6) 出雲大社は変わりなく存在していたのか—変わる祭神、神と仏、出雲大社の古代・中世・近世—
- (7) 平安貴族は遊んでばかりいたのか—古代・中世転換期の11世紀末、因幡守になった実務官僚平時範にみる—
- (8) 源義親はなぜ反乱を起こしたのか—山陰からみる中世への展開—
- (9) 大山寺はどのような歴史をたどったのか—山陰の古代・中世仏教—
- (10) 古代の山陰地域と朝鮮半島はどのような関係にあったか—古代山陰と東アジア—
- (11) 渤海と山陰地域—日本海を越えた交流—
- (12) 中世の山陰と朝鮮はどのような交流があったか—中世日本海交通の発展と倭寇、朝鮮—
- (13) 石見銀山は世界史の中でどのような位置にあるか—山陰から世界へ—
- (14) 出雲国風土記はどのように伝えられ、広まったか—中世・近世の風土記、近代の国引神話、古代はどのように認識されたか—

2. 「山陰の歴史—古代・中世」—グローバルな前近代史を考えるために—

(1) 「出雲」はいつからあるか—地域を考える—

地域、あるいは地域区分は自明ではない。歴史的に形成されてきたものであり、他地域と重なり合う重層的、可変的なものでもある。日本という枠組み自体が歴史的に作られてきたものであり、前近代は異なっていたことは念頭に置いておきたい。その上でまず「出雲」「山陰」とはいつからあるか考えてみる。

◆東西出雲論

鳥取県西部から島根県山陰地域の古墳の地域別編年分布を見ると、いくつかの地域ごとに継続的に古墳が築造されていることがわかる。

ここでの日野川左岸とか、松江南部といった地域区分も考古学的見地からの設定で、その根拠自体を考えなければならないが、とりあえずその地域区分に従った分布をみってみる。A 日野川左岸、B 飯梨川以東・以西、C 松江南部、D 宍道湖北岸、E 斐伊川・神戸川流域などに古墳が継続的に築造されている。このうちAとBの間に伯耆と出雲の境が引かれる一方、宍道湖を挟んだC・DとEが出雲の東部と西部とされる。

Aは前方後円墳が多く、B・C・Dは前方後方墳が多い。この差が出雲と伯耆の境界になると考えられそうだが、一方でEも前方後円墳が多い。しかしともに出雲とされる。この出雲のB・C・DとEは出雲東部と西部で、それぞれに勢力があって、それらの関係から7世紀までの出雲を考えようという研究動向がある。東西出雲論と呼ばれることもある。東西の勢力それぞれにヤマトの王権と関係を持ちながら統一され、律令国家体制の出雲国が成立したとするものである。武廣亮平 2024 に研究史の整理がある。

出雲西部と東部の関係、ヤマトの王権との関係の内容をどう捉えるか様々であるが、律令制下の出雲国を暗黙の前提に、その東部と西部の関係として論じられる傾向がある。そもそも出雲東部、出雲西部と2つに単純化できるのか、後の大原郡や仁多郡・飯石郡にあたる山間部はどうか、ヤマトの王権だけでなく、大山周辺（後の伯耆西部）や吉備との関係はどうだったのかなど、周辺諸地域との関係から多様な地域を考える必要はあるだろう。その上で、結果的に宍道湖の西、東、それに南の山間部が出雲国となっていた歴史的要因とプロセスを考えていくことが重要である、

◆文献史料にみえる「出雲」

『日本書紀』には、巻1神代上第8段本文に記されている高天原を追放されたスサノオが「出雲国簸川上」に降り立ったとする話など、何か所かに「出雲」の表記がみえる。『日本書紀』は日本律令国家形成過程の7世紀末頃から編纂が始まり、養老4年(720)に完成した史書であり、律令国家の歴史認識によって記されている。そもそも神話はフィクションであり、そこに登場する「出雲」は、神話が作られた時代の認識にもとづくものである。したがって、他の史料とつきあわせて、『日本書紀』の論理を明らかにし、何が歴史的事実なのかを明らかにしていかなければならない。

『日本書紀』以外で7世紀を考える重要な史料に木簡がある。たとえば藤原宮出土木簡のなかには「出雲評支豆支里」「出雲国嶋根郡副良里」と記されたものがある。

7世紀後半には、地方行政単位の評が設置され、評の役人には旧国造など地域の有力首長層が任命された。評の下にはいくつかの里が置かれた。評の上に国が設置された。701年の大宝律令施行によって評は郡に改められた。

これらと照らし合わせれば、7世紀末までには出雲評が置かれ、出雲国もそのころまでには成立し、その後、出雲評が出雲郡になったことがわかる。

律令国家は、「日本」という国号を採用し、天皇を君主として、国・郡・里（郷）の地域区分、官僚制、文書行政によって統治する国家体制として成立した。その過程の7世紀後半、天武12～14年（683～85）に諸国の国境画定作業が行われている。それとともに後につながる「出雲」という名称をもつ地域と範囲が成立したとみることができる。ただしそれがまったく新しく作られたものなのか、それ以前からの地域的なつながりにもとづくものなのか、研究の課題になっている。

（参考文献 石野博信 1995、武廣亮平 2024、松尾寿・田中義昭・渡辺貞幸・大日方克己・井上寛司・竹永三男 2005）

(2) 『出雲国風土記』から何がわかるか—『出雲国風土記』と古代の社会—

古代の出雲を知ることのできる史料に『出雲国風土記』がある。風土記は和銅6年（713）5月に諸国に編纂が命じられたもので、『出雲国風土記』は天平5年（733）に完成、撰進された。ほぼまとして現存する風土記は、常陸・播磨・出雲・豊後・肥前の5か国で、それ以外の国のものは失われ、断片が後世の書に引用されるだけである。

現存するといっても原本は残っておらず、写本によって伝えられてきた。現在確認されている最古の写本は、慶長2年（1597）に細川幽齋が徳川家康所持本を書写し、熊本藩細川家に伝わったもので、細川家本という。風土記自体は近世以前はほとんど知られておらず、江戸時代に写本で広がり、全国に知られるようになった。学者たちを中心に研究され、注解本などが書かれるようになった。風土記は、古代からずっと読まれてきたわけではなく、江戸時代にいわば「再発見」されたものだった。

『出雲国風土記』の内容は、律令国家の行政区画に基づき、郡毎に同じ形式で、郡内の郷・駅・神戸、寺院、神社、山、川等の位置や地名の由来、山野河海の産物等が記述される。末尾には郡司名の欄があり、天平5年当時の各郡の郡司の氏姓をある程度知ることができる。

『出雲国風土記』からどのような古代出雲の地域像を明らかにするか。江戸時代より行われてきたのは、それぞれの地名が現在のどこに当たるか探求し、出雲国全体の地理的な状況を明らかにすることだった。近年では、考古学発掘調査、歴史地理学などの手法と成果もふまえながら、国府、郡家、正倉、軍団、新造院（寺院）、交通路などを解明する、動

植物の記述とその背景を考える、地名由来伝承の記述から古代の神話や思想を検討し、背後の歴史的事態を探る、などの研究が進められている。日本古代国家の制度や社会の中での位置づけにとどまらず、記述や文章表現の基盤となった中国古典籍との関係、記述の背景としての東アジア世界との関係などにも目が向けられている。

(参考文献 勝部昭 2002、島根県古代文化センター2023、松尾寿・田中義昭・渡辺貞幸・大日方克己・井上寛司・竹永三男 2005)

(3) 国府の役人は何をしていたか—出雲国府にみる—

8世紀の出雲に関しては、『出雲国風土記』以外にも、正倉院文書のなかに国府で作成された公文書、天平6年(734)度「出雲国計会帳」、天平11年(739)「大税賑給歴名帳」がある。計会帳とは公式令で各官司に毎年、作成と提出が義務付けられている文書で、1年間に授受した公文書のリストになっており、太政官は適切に文書が授受されているかを確認、監査した。出雲国以外には伊勢国のものの断簡しか残っていない。残念ながら出雲国計会帳も一部しか残っていない。それでも日常的に国府がどのようなことをしていたか、ある程度わかる史料である。

高等学校の教科書にも出てくる戸籍・計帳の作成、租・調・庸の徴収、調・庸など貢納物の京送、公出挙の貸付け、収納などがある。調・庸の京送にあたっては、物品の一つ一つに年度、物品名・量、負担した人名と国郡郷名などを記した付札木簡が付された。それら大量の木簡は毎年国郡司らが作成した。また公出挙の正税の利稲(利息)などは国府の財源になり、租とあわせた毎年の収支決算報告書である正税帳などの帳簿類も作成し、政府に提出しなければならなかった。文書行政の事務量は大変だったと推測される。

天平6年度出雲国計会帳は、天平5年8月から6年7月までの出雲国府が授受した文書の題目を、発信元の官司、送付先の官司ごとに前者は到着日付順、後者は発信日付順に記したものである。出雲国府の行政の具体的な姿が垣間見える。このなかで注目したいのが、節度使との間で授受した文書である。

節度使は天平4年に西海道、山陰道、東海・東山道に設置され、同6年には廃止された。西海道節度使には参議藤原宇合、山陰道節度使には中納言多治比郡守、東海・東山道節度使には参議藤原房前という太政官中枢の貴族が任命された。山陰道節度使の鎮所は石見に置かれた。それぞれ管轄内諸国の軍事体制を整えることが任務だった。それが具体的にどのようなものだったのかが、出雲国計会帳に見える出雲国府と節度使の間でやり取りされた文書の題目から窺うことができる。

それによると、弩の製造、配備、その教習を受ける人員の召集、その材料の調達、馬射と馬槍の訓練、出雲・隠岐間の烽火の設置と訓練を命じたりしている。弩は、大陸では主要な武器として使われていた機械仕掛けで矢を発射する弓だが、日本ではこれ以前にはほとんどなかった。騎射(馬射)は中央の衛府を中心に行われてはいたが、諸国の軍団は百

姓から徴発された歩兵を基本としていたために、馬槍とともにほとんど行われていなかった。いずれも大陸では戦闘手段としてよく使われていたものである。烽火は「のろし」のことで、大宝令で規定されていたが、改めて離島隠岐からの非常時緊急連絡用として機能するよう整備されたのであろう。『出雲国風土記』に烽火の記述がみえるのも、これに対応したものとみられる。

このように『出雲国風土記』は節度使体制とも関係すると考えられており、編纂責任者の出雲臣広島が節度使に召喚されていることも計会帳にみえる。

山陰道諸国は日本海をはさんで新羅に対峙する位置として、西海道・大宰府とともに軍事体制の整備が図られたのである。山陰道節度使に多治比県守、西海道節度使に藤原宇合が任じられたのも、ともに養老元年（717）の遣唐使として入唐経験をもち、大陸の状況に明るかったことにもよるだろう。

（参考文献 大日方克己 2022A、松江市 2015）

（4）「出雲神話」とは何か—古代王権神話と出雲—

◆『古事記』『日本書紀』の神話

『古事記』『日本書紀』に記される神話の中で、スサノオのヤマタノオロチ退治やオオクニヌシの話など出雲を舞台にしたものを、出雲神話と呼ぶことも多い。なお神名の漢字表記は複数あり、また同一神に異名もあり、書き分けると煩雑なので、ここでは便宜的にカタカナで統一表記する。

『古事記』上巻の神話は一つのストーリーとして記述されるが、『日本書紀』神代と『古事記』では異なる部分が少なくない、また『日本書紀』では本文に対して、「一書曰」として多数の異なった話を併記する。

『古事記』のなかで出雲とかかわった話は次のとおり。①イザナギが黄泉国を訪問するが、その入口が出雲だという話。②スサノオが高天原を追放され出雲国肥河上の鳥髪のに降り立ったという話。③スサノオがヤマタノオロチを退治する話。④オオクニヌシの試練、妻問、国造りなどの話。⑤オオクニヌシが国譲りをして身を隠す話。

これに対して『日本書紀』本文では④がなく、②③と⑤を中心としている。②に続く③は、娘をヤマタノオロチに食われそうになっている老夫婦-アシナヅチ・テナヅチをスサノオが発見し、ヤマタノオロチを退治する。ヤマタノオロチの体内から草薙剣を取り出しアマテラスに献上する。助けた娘クシナダヒメと結婚して清地（須賀）に宮を営み、その子がオオクニヌシとなるという話である。この草薙剣が後に、王権のシンボルになる。

⑤の国譲りの結果、天孫ニニギが高千穂峯に降臨し、やがてその子孫が日向から大和へ東征し、神武天皇として即位する話につながっていく。

『日本書紀』本文は、天皇の由来と日本国統治の正当性を示しているわけである。神話は、単なる神々の物語ではなく、極めて王権や政治権力と結びついたものだったことに注

意しなければならない。

◆王権神話のなかの杵築大社

『古事記』では、オオクニヌシが国譲りをした後に、自分の住処は柱を太く、千木を高く祀ってくれればそこに隠れようと言ったとするが、それがどこかは具体的には記していない。『日本書紀』も記していない。『延喜式』巻8に規定されている「出雲国造神賀詞」では杵築宮に静まったとする。神賀詞奏上とは、杵築大社の祭祀をつかさどる出雲国造が節目に神宝を献上し、天皇の国土支配を保証するため奏上するもので、その由来が述べられている。『出雲国風土記』では出雲郡杵築郷の名称の由来は、諸神が集まって宮を「杵築きき」（きつきき＝築いた）ので寸付（きつき）というとして記している。オオクニヌシは杵築大社に鎮まったと考えられていた。現在は出雲大社というが、ここでは原則として近世までの名称、杵築大社を使う。

日本律令国家の形成とともに王権神話が体系化されていった7世紀後半、『日本書紀』斉明5年（659）是歳条に、出雲国造に命じて厳神の宮を造営させたとみえる。これが杵築大社の成立と深くかかわっているとみられている。

この659年は、東アジア激動の只中だった。朝鮮半島では、655年に高句麗と百済が新羅を攻撃し、新羅は唐に救援を求めた。唐はそれに応じて658年、659年に高句麗の北辺を攻撃した。この658～660（斉明4～6）年に阿倍比羅夫が日本海側を北方（今の秋田、津軽、北海道方面）に遠征し、659年には遣唐使が派遣された。これらは緊迫化する朝鮮半島の激動を意識したものだだった。

そして660年には、唐・新羅連合軍の攻撃で百済はいったん滅亡した。しかし鬼室福信らが挙兵して、百済復興の抵抗運動を開始した。倭国はこれに応じて飛鳥にいた王子豊璋を新王として送り、救援軍を派遣したが、663年に白村江の戦いで大敗した。復興運動は崩壊し、百済の滅亡は確定した。

まさにこのような百済滅亡直前の緊迫した状況のなかで杵築大社が造営されていたのである。杵築大社の鎮座する島根半島西端の山塊は、『出雲国風土記』の国引神話で、ヤツカミズオミツノが新羅から引いてきて出雲に付け加えたとしている所である。また『日本書紀』神代第8段一書第4では、高天原を追放されたスサノオは、新羅国曾尸茂梨に天下って、埴土の舟を作って東にわたり、出雲国の簸の川上にある鳥上の峯に至ったとしている。神話のなかでも、出雲と朝鮮半島がつながっていると意識されていた。杵築大社の造営は、こうした半島の激動に対する日本海側の鎮護としての意味合いもあったと考えられる。杵築大社の成立は東アジア世界のなかでも考えなければならない。

（参考文献 岡田精司 1992、菊地照夫 2016、鈴木靖民 2016）

(5) 「出雲神話」はどのように変化したか—神話は変わり、神話は創られ続ける—

神話は創造され続ける。スサノオやオオクニヌシが登場するからといって古代の神話とは限らない。『日本書紀』神代の記述は中世にかけて解釈され続け、解釈によって新たな神話が作られていく。「中世日本紀」とも呼ばれる中世神話が展開する。

建武3年(1336)「国造孝時解状土代写」(千家家文書)は次のように記している。杵築大社の祭神はスサノオで、十束の利剣を振って八咫の毒蛇を割き、八目の鏑箭をもって呉国の凶徒を討ち、国域の太平を実現した。さらに戎敵を防ぐため、神殿を高大に建て、四海を守り、不虜に備えたので矢蔵明神と呼ぶ。また浮山を留めてそこに潜んだので杵築大社という。法楽の経巻が固まって島をつくり、警固の甲冑が石と化した。靈威がすでに天下に振るい、明德がひろく海内に聞こえる。その他の奇特は数えることができない。本地の加被をあおぎ、聖主がことさらに敬神すべきはこの神である。垂迹の護持をたのみ、武家が最も崇敬すべきは当社である。

呉国の凶徒を討ったというのは元の襲来を防いだという意にも解せる。また浮山を留めてそこに潜んだというのは、鰐淵寺のある山塊は靈鷲山の北東の隅が欠けて浮浪してきたのを、スサノオが築き留めたもので、それで浮浪山という話にも対応する。

中世出雲神話では、杵築大社の祭神がオオクニヌシからスサノオに転換し、神仏習合を反映して、仏教聖地靈鷲山の片割れをスサノオが引き留めて鎮座した、スサノオが国引きをしたという話にもなっている。そして外国の攻撃を打ち払う国家を守る武神としての性格を強調する。スサノオを中心に仏教的世界観を織り込みつつ、対外的脅威にも対応する神話として語られていった。ここにもアジア的視野から中世出雲神話を考えてみる必要性が示されている。

(参考文献 出雲弥生の森博物館 2013、斎藤英喜 2012、大社町 1991)

(6) 出雲大社は変わりなく存在していたのか

—変わる祭神、神と仏、出雲大社の古代・中世・近世—

中世杵築大社は祭神をスサノオに変え、スサノオ中心の神話を語っていた。そして鰐淵寺と結合し、神仏習合、神仏混交の中で推移した。鰐淵寺僧が神前で大般若経を転読したり、中世杵築大社の最重要年中行事、三月会に参加したり、仏教色をもった神話が語られたりしていた。

神殿自体も変わっていった。出雲大社といえば、巨大神殿が強調されている。2000～2001年の発掘調査で巨大な柱根が発見され、想像復元された高さ 48メートルにも及ぶ高大な姿が広まっている。

出雲大社に伝わる伝承として、上古には32丈(96m)、中古には16丈(48m)、その後は8丈(24m)だったという。江戸時代の寛文7年(1667)造営遷宮以後の神殿は24mであるが、それ以前に96m、48mもあったかは史料上確認できない。10世紀の『口遊』に「雲太、和

二、京三」とある言葉を、雲太＝出雲大社の神殿、和二＝東大寺大仏殿、京三＝京の大極殿のことで、その高さの順番を示していると解釈して、出雲大社が巨大神殿だったと主張したのは江戸時代の国学者本居宣長だった。2000～01年の発掘調査で発見された柱根や、千家国造家に伝わった鎌倉時代の「金輪造営図」は平面構造を示すだけで、その高さや上部構造が描かれているわけではない。本当に48mもあったかどうかは不明と言わざるを得ない。

発掘調査で発見された柱根は、年輪年代測定と炭素14年代法による測定、文献史料とのつきあわせから、鎌倉時代の宝治2年(1248)に造営遷宮され、文永7年(1270)に焼失したものであることが明らかになっている。史料上はそれ以前の平安中期～鎌倉中期にかけて、長元9年(1036)、治暦3年(1067)、永久3年(1115)、久安元年(1145)、建久元年(1190)、宝治2年(1248)の造営遷宮が確認される。それぞれの時期の受領や知行国主、国衙による造営で、院の権威、鎌倉幕府の関与などを背景に、ある程度の規模をもっていたことは推測される。

しかし文永7年の焼失後は、それまでのような造営がままならず、仮殿式による造営が慶長14年(1609)まで11回記録されている。大規模な神殿が造営できず「仮殿」と称したのであろう。中世後期には尼子氏の介入もあって、三重塔など仏教色の強い建物も建てられた。

寛文7年(1667)には、松江藩と江戸幕府の援助で8丈(24m)の正殿が造営され、現在の出雲大社本殿(延享元年(1744)造営)に継承された。この寛文の造営にあたっては、三重塔を撤去するなど仏教色を一掃し、祭神をオオクニヌシに戻すなど中世の否定と古代への回帰が図られ、神仏分離が行われた。

このように、杵築大社は古代から中世そして近世と、思想も神殿も大きく姿を変えてきた。神社は決して古代から変わらず続いてきたものではなく、歴史のなかで変化しながら現代に至ったのだという点に注意すべきである。

(参考文献 佐伯徳哉 2017、大社町 1991、田村亨 2024、浮浪山鱒淵寺 1997、西岡和彦 2004、松江市 2016、松尾寿・田中義昭・渡辺貞幸・大日方克己・井上寛司・竹永三男 2005)

(7) 平安貴族は遊んでばかりいたのか

—古代・中世転換期の11世紀末、因幡守になった実務官僚平時範にみる—

近年の研究により明らかになってきた政務、実務に多忙な貴族と受領の実態を、11世紀末に因幡守に任じられた左少弁平時範の日記『時範記』から考える。『時範記』には康和元年(1099)2月～3月の任国因幡への下向と滞在、帰京の部分がまとまって残っている。

因幡への旅は、山陽道の山崎、川面、明石、高草(姫路付近)を経て美作道へ、佐用、坂根を経て志戸坂峠を越え因幡に入国、千代川に沿って北上して国府(鳥取市)に到着し

ている。途中、摂津、播磨、美作の受領から馬や食料、宿泊用の仮屋を提供されたり、饗宴のもてなしを受けたり、さまざまな便宜を図ってもらっている。帰路もほぼ同じルートを取っている。物資の京への輸送は日本海海路を取っていたようである。

この山陽道經由中国山地越ルートは、因幡だけでなく伯耆や出雲と京を結ぶ主要ルートとして古代からよく利用されていた。江戸時代の鳥取藩や松江藩の参勤交代ルートでもある因幡街道、出雲街道に踏襲されている。

2月15日には因幡への入国にあたって志戸坂峠で境迎を行っている。新任受領と在庁官人たちの初顔合わせの儀式である。『朝野群載』巻22「諸国雑事」に載せる受領の心得「国務条々事」にも記され、それぞれの国のしきたりに従うようにとされている。時範も前日に因幡国在庁官人のもとへ使者を派遣して、しきたりを問い合わせている。

1か月半ほどの国府滞在中は各種文書の決済など国務のほか、国府に北隣する一宮宇倍社の各種行事にも参列し、国内諸社への神拝も行っている。宇倍社社司伊福部久経は介として在庁官人トップでもあった。一宮や諸社神拝は、国衙と一宮を中心とした国内秩序を尊重し、依拠する宗教的儀礼行為でもあった。また3月19日には館侍と国侍に射を競わせていることも着目されている。館侍とは受領が京から引き連れてきた直属の従者で、国侍は国衙に結集した在地の武士たちで、これこそが国衙の軍事力を構成するものだと考えられている。このように国内の地域社会の形成とそれに則った受領のあり様がみえる。

(参考文献 石井進 1987、大日方克己 2019B、佐々木恵介 2004、森公章 2016)

(8) 源義親はなぜ反乱を起こしたのか—山陰からみる中世への展開—

◆源義親の乱

中世成立期の山陰地域の大きな事件が源義親の乱であり、これを通じて平安後期、中世成立期社会の特徴を考える。

源義親は義家の子である。対馬守だった康和3年(1101)、舅の前肥後守高階基実らと公物の押領、殺害などを行ったとして大宰府から政府に告発された。政府は追討使を派遣したが、義親は首藤輔道とともに追討使を殺害してしまう。康和4年12月末に義親は捕らえられ隠岐に配流された。嘉承2年(1107)6月に義親は隠岐を脱出して、出雲守藤原家保の目代と郎従を殺害し、公物を奪取した。近隣諸国にも義親に同調する動きが広がった。政府は12月に平正盛を因幡守に任じ、追討宣旨を発して派遣した。翌天仁元年(1108)年正月19日には義親を討ち取ったという報告が政府に入り、29日には都で凱旋パレードが行われた。

この一連の経過で以下の3点に注目したい。

一つは平正盛の軍事力である。正盛は因幡守であることと追討宣旨を法的根拠にして軍事力を行使した。正盛の直属軍とともに因幡守として因幡国衙軍を、追討宣旨により因幡以外の諸国(伯耆、出雲か)の国衙軍も動員指揮できた。この国衙軍が在地の武士を結集

した平安後期の軍制の基本だとされている。追討宣旨によって、戦争は私戦ではなく、国家による反乱鎮圧の戦争という正当性を得ることになる。

二つ目は、義親の行動を反乱とした大宰府、政府は、公物の横領、奪取、百姓の殺害を理由としている。この時期の財政は、受領のもとに百姓からの租税官物等の徴収物が蓄積され、それが政府への納入物と受領の収益にもなる構造になっていた。物理的にも帳簿上も公物と私物を区別できない状態が構造化していたのである。こうした状態の中では、逆に政府や大宰府などの見方次第で公物横領を主張することも可能であった。この「公物」の実態を、この時期の財政構造の中で見極めなければならない。

三つ目は、義親が出雲で受領の目代らを殺害し、義親に同調する動きが近隣諸国に広がった背景である。受領の租税官物徴収や、それをベースにした私富蓄積は、地域の一般百姓からすれば厳しい収奪になっており、不満、反発が高まっていたと考えられる。藤原家保は京におり、目代が出雲国衙を指揮して租税官物徴収を行っていた。受領への反発の矛先は直接には目代と国衙に向いていたといえよう。そうした目代を殺害した義親が、地域の百姓たちに歓迎され、同じように不満をもつ周辺諸国の百姓にも同調する動が広がっていったのではないかと考えられる。

◆義親の乱後の山陰一杵築大社の造営

こうした反発の広がりとの関係で考えなければならないのが永久3年(1115)の杵築大社神殿の造営遷宮である。

源義親の乱後すぐ、天仁元年(1108)正月24日の除目で、平正盛は但馬守に栄転し、因幡守に藤原長隆、伯耆守には藤原家光、出雲守には14歳の藤原顕頼が任じられた。藤原顕頼は顕隆の子、長隆は顕隆の弟、顕隆と長隆は為房の子である。この顕隆は、妻悦子が鳥羽天皇の乳母であり、白河院近臣として権力の中枢に位置する人物だった。為房も、院近臣であるとともに蔵人や弁官として天皇周辺や太政官の実務を仕切っていた。顕頼は少年なので、父の顕隆か祖父の為房が知行国主として、出雲の国務の実質を握ったものと考えられる。院近臣の藤原為房・顕隆一門(勸修寺流)が受領、知行国主になったことで、山陰諸国は白河院の影響下に置かれたのである。

翌天仁2年(1109)から進められたのが杵築大社神殿の造営だった。鎌倉時代の史料「杵築大社造営遷宮旧記注進」(北島家文書)には、天仁3年(天永元年、1110)に海上から稲佐浜に何百本もの大木が漂着したが、これは因幡国上宮(宇倍社)の神が、杵築大社の造営のために因幡から送ったものだという伝説が記されている。

その天永元年7月に藤原顕頼が初めて任国出雲国に下向した。この伝説は、それにあわせて因幡から送られた材木で杵築大社神殿が造営されたことを示しており、材木の長さ15丈(45m)だったとしていることから、規模の大きさもうかがえる。白河院の権威を背景に、勸修寺流藤原氏一門が受領・知行国主をつとめる因幡国と出雲国が連携して杵築大社を造営したといえる。白河院の主導のもと京で進められていた六勝寺などの巨大寺院群造

営に従事していた技術者たちが招かれ、杵築大社の大規模神殿の造営にあたったとも推測される。こうした造営事業は、義親の乱で不安定になった出雲国や山陰の地域社会を、白河院の権威を背景に杵築大社によって安定させようとしたものだったとも考えられている。

(参考文献 石井進 1987、佐伯徳哉 2014、2017、
高橋昌明 2004、中込律子 2013、松江市 2016)

(9) 大山寺はどのような歴史をたどったのか—山陰の古代・中世仏教—

◆『大山寺縁起』の義親追討説話

鎌倉末期に成立したと考えられている『大山寺縁起』には、次のような平正盛の義親追討説話がみえる。

平正盛が因幡守として義親追討のため下向したとき、大山寺に参詣したところ神の夢があった。三か国の軍勢を率いて、義親の立て籠もる雲州蜘蛛の岩屋を攻めた。ひとえに大山権現を信じたので、義親の首を取ることができた。

雲州蜘蛛は、島根半島の北側にある雲津のことで、『出雲国風土記』にも久毛等浦としてみえ、船 10 艘が停泊できると記されている。中世～近世には隠岐に渡る航路の発着地で、東西の日本海交通の結節点の一つでもあった。この説話自体をそのまま歴史的事実とするわけにはいかないが、こうした隠岐と出雲をめぐる交通の実態をふまえたものであり、義親の乱は山陰地域にとって重要な事件として伝承されていったことはいえるだろう。

◆大山寺の成立と展開

『大山寺縁起』では、大山寺は出雲国玉作出身の金蓮上人の開基だとしているが、歴史的事実としては確認できない。『出雲国風土記』では大山は「火神岳」とされ、9 世紀には大山神に対してたびたび神階が授与されている。『延喜式』では大神山神社とされる。大山は神であり、山岳信仰の場だった。

大山寺の史料上の確実な初見は 11 世紀末、藤原宗忠の日記『中右記』嘉保元年(1094)閏 3 月 8 日条、伯耆大山の大衆 300 人ほどが上洛して、白河院に強訴したという記事である。

『大山寺縁起』にも対応する話がみえ、西明院、中門院、南光院が地藏会の頭役をめぐって内部抗争し、上洛して白河院の裁定を求めたとしている。11 世紀末までには、三院が地藏会を中心に結びつき、利害対立をはらみながらも、全体として大山寺を形成していたことがわかる。

三院それぞれも多数の子院の集合体だった。西明院は阿弥陀如来と利寿権現、中門院は大日如来と霊像権現、南光院は釈迦如来と金剛童子を信仰の中心として祭ることで結合していた。そして全体としては地藏信仰と修験道の場でもあった。『梁塵秘抄』にも修験の場として日御碕、鱒淵、伯耆大山が歌われている。島根半島から大山に至る線が修験の道でもあった。同時に浄土信仰の場でもあった。『後拾遺往生伝』の出雲国良範上人や成相寺住僧相院の話にあるように、島根半島も浄土信仰の場であり、その西端の日御碕や杵築大社

西の稲佐浜は極楽浄土につながる場としても認識されていた。古代では新羅とつながると認識されていた島根半島西端は、中世には浄土とつながり、あるいは浮浪する靈鷲山の一部が引き留められたという仏教的世界観のなかの場としても認識されるようになっていた。

このように神仏習合、修験道、阿弥陀信仰、そして仏教的世界観などの中世宗教の特徴を大山の歴史から追っていくことができる。

こうした大山は守護権力、戦国大名尼子氏、毛利氏といった地域支配権力の保護を受けて展開した。近世には、西楽院が大山一山を差配し、輪王寺宮の支配下に入った。輪王寺宮が兼任する天台座主の居所滋賀院から代官が西楽院に派遣されてきた。

明治維新时期には、新政府により輪王寺宮から没収され鳥取藩支配下になったが、それに対する抵抗により、1875年に大山寺は廃止され大神山神社となった。仏像・仏具などは処分され、神仏分離がはかられた。1903年に、もと中門院の大日堂を本堂として大山寺が復活して、現代に至っている。

大山の歴史を通して、古代から近代にいたる神仏の宗教史、政治権力との関係など日本史の骨子となる部分を通して追うことができる。地域と日本の各時代の歴史的展開を通史的に考える格好の素材となるのが大山である。

(参考文献 佐伯徳哉 2017、大山町教育委員会 2011、
鳥取県立博物館 2018、松江市 2016、米子市 2003)

(10) 古代の山陰地域と朝鮮半島はどのような関係にあったか—古代山陰と東アジア—

これまで、断片的に東アジアや世界観を視野に入れた山陰地域の古代・中世の問題を扱ってきたが、ここから体系的に山陰地域と東アジア世界との関係を考えていく。

◆古代日本の対外関係

まず東アジアのなかにおける古代日本律令国家の対外関係は、君主間の外交関係を基本として、公使の往来を軸とする。それに付随して、各種外交儀礼、交流、交易、留学生の派遣が行われた。

公使としての遣唐使の派遣は632～838年の間に16回なのに対して、新羅使は7～9世紀に40回以上来日、遣新羅使は24回以上派遣された。渤海使は8～10世紀に34回来日、遣渤海使は14回派遣された。遣唐使よりも新羅、渤海との公使往来が頻繁で、このルートで入ってくる唐の文物も多かった。

唐・新羅への公使の交通ルートは、難波、瀬戸内海、大宰府・博多を經由して渡海するものだった。大宰府が大陸諸国との外交窓口になっていた。渤海の場合は、現在の朝鮮半島北部・中国東北地方・ロシア沿海地方にまたがる地域に位置することから、日本海を越えて日本と交流した。8世紀には東北から北陸の日本海沿岸地域に来着し、遣渤海使も能登から渡海することが多かった。9世紀には北陸から山陰の西部日本海沿岸地域に来着することが多かった。

9世紀に入ると状況が変わってくる。日本・新羅間の公使の往来はほぼなくなり、遣唐使も838年が最後になった。渤海使の来日は10世紀前半まで続き、北陸から山陰の西部日本海沿岸地域に到着するようになった。一方で遣渤海使の派遣はなくなった。

公使の往来がなくなったことが、交流の断絶を意味するものではない。9世紀には、新羅や唐の海商が頻繁に来日し、彼等との交易の体制が作られたことによって、必ずしも公使の派遣を必要としなくなった。

唐、新羅、渤海が滅亡した10世紀以降はさらに新しい東アジア諸国関係に入っていた。

◆山陰地域と新羅

『日本書紀』神代上第8段一書第4には、高天原を追放されたスサノオが新羅国曾尸茂梨に天下り、埴土の舟を作って東にわたって、出雲国の簸の川上にある鳥上の峯に至ったとある。『出雲国風土記』意宇郡条冒頭の「国引詞章」にはヤツカミズオミツノが新羅の一部を引いてきて継ぎ足したのが支豆支（杵築）の御崎だとする。神話のなかで、出雲と新羅がつながっていることが語られていた。

考古学的には、たとえば弥生時代には山陰各地で朝鮮半島系土器が多数出土し、松江市田和山遺跡では楽浪郡系の硯が発見され、また玉や鉄器など朝鮮半島との交流を示すものが少なくない。その流入ルートは朝鮮半島―北部九州―山陰が推測されている。こうした弥生時代以来の日本海交流を背景に、出雲と新羅との関係の認識が作られていったのであろう。

杵築大社の創建が660～663年の倭国の百濟救援、白村江の敗戦の直前だったことは先に取り上げた。杵築大社の創建を、王権神話のみに求めるのではなく、現実の朝鮮半島、新羅を意識したものであった点にも注意を払うべきである。

日本律令国家成立後も、日本と新羅の関係は大きな問題だった。日本は新羅を従属国として位置づけようとし、それに新羅は反発して、緊張関係が生じることもしばしばだった。天平4年(732)には、西海道、山陰道、東海・東山道に節度使が設置され、軍制の整備が進められた。詳細は先に取り上げたが、天平6年度「出雲国計会帳」により、山陰道節度使の指示でどのような軍備が整えられたかわかる。西海道とともに山陰道は朝鮮半島・新羅に対峙すると国家的に位置づけられていた。

9世紀に入って、新羅人が博多や北部九州、西日本海域にたびたび来航するようになり、博多・大宰府を中心に交易が展開する。一方で新羅海賊などによる緊張もしばしばだった。そのたびに山陰地域にも新羅に対する警戒、軍備が指示された。その最も大きなものが、9世紀後半貞観年間である。

この貞観年間には、日本列島各地で大地震、噴火、風水害などの大規模自然災害があいついだ。貞観5年(863)越中・越後大地震、6年富士山噴火、9年豊後の鶴見岳噴火、10年播磨大地震、11年陸奥大震災、13年出羽の鳥海山噴火、16年薩摩の開聞岳噴火、年号が

かわって元慶2年(878)南関東大地震、4年出雲と京の大地震、そして仁和3年(887)の南海トラフ巨大地震まで続いた。その間には疫病の大流行もあり、貞観5年に初めて疫病退散のための神泉苑御霊会も行われた。貞観8年には応天門が炎上する怪異も起こった。これは大納言伴善男が左大臣源信を失脚させようと放火したものだとして、善男が失脚する政治事件として処理されたが(応天門の変)、それ以外にも各地から怪異が報告されている。

こうした災害や怪異は隣国が侵攻してくる兆し、疫病が大流行する兆しだという神祇官・陰陽寮の卜占があり、新羅に対する警戒感が極度に高まった。応天門が炎上した貞観8年(866)には、大宰府官人と北部九州の郡司層が新羅と通謀しているとして検挙された。山陰でも隠岐守越智貞厚(貞原)が新羅人と通謀していると告発された。これは後に無実だとされたが、新羅通謀事件は卜占の現実性を増していった。

貞観8年の11月には因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐の山陰諸国と能登・長門・大宰府諸国に対し、神明の冥助を得るため諸神への班幣を、翌9年5月には新羅の賊心を調伏し、災害を消却するため、伯耆・出雲・石見・隠岐・長門に四天王像を安置することが指示された。

同11年5月には陸奥で巨大地震とそれに伴う大津波が発生し、壊滅的な被害をもたらした。同時に新羅の海賊船が博多に停泊中の豊前国貢調船を襲撃し積荷を略奪する事件が起こった。この列島東西でほぼ同時に発生した大震災と新羅海賊襲撃事件で、卜占の警告がついに現実になったと、政府は神仏への祈願を繰り返した。伊勢神宮はじめ諸神への奉幣では、日本は神明の国であり、神の力で襲来してくる外敵を海に沈めてくれと祈願している。後の日本は神により外敵から護られるという思想表現は、このときの神に奉げた文、告文にさかのぼる。

現実の軍備として、日本海沿岸諸国への弩師の配置も命じられた。天平4年(732)の節度使体制下でも弩の配備が進められたが、結局定着しなかったため、改めて弩の製作、教習を担当する弩師を任命し、弩の配備と訓練を進めようとしたのである。弩には小型の手弩もあるが、ここでは陸上から船も攻撃できる大型の弩であろう。すでに8世紀以来大宰府やエミシと対峙する陸奥には設置されていたが、今回は貞観11年の隠岐を皮切りに、同17年にかけて長門・出雲・因幡・伯耆・石見の西部日本海沿岸諸国に任命された。

貞観9年に命じられた四天王像の配置は、8世紀後半に大宰府の背後、四王寺山(大野城)に四天王像を設置して四王寺としたことを先例とした。新羅を見通せる高地で清浄な場所を選んで設置せよというものだった。伯耆は国府北方の四王寺山、長門も国府北方の四王司山に比定され、大宰府の四王寺に類似する。また出雲も国府北方の茶白山山麓の山代郷南新造院跡(四王寺廃寺)、『出雲国風土記』にみえる飯石郡少領(後に出雲国造)出雲臣弟山が建立した新造院に比定されている。

このように大地震や噴火など地殻変動による災害と疫病が対外的脅威と結びついて危

機感が極度に高まったのが貞観年間だった。一方、新羅でも日本の侵攻に備えて都の南東、日本の方角の守りとして四天王寺を設置していた。また対外的脅威といっても海賊が問題であって、新羅が国家的に軍事侵攻しようというものではないし、またその力もない現実だった。ある意味では、日本の一方的な被害妄想だったともいえる。だから一時的なものでもあった。しかし、大災害が排外的意識と結びついたことは、現代の社会でも起こりうることで、注意すべき点である。

出雲国では、10世紀でも四王法が修されていたことが「出雲国正税返却帳」にみえる。新羅の脅威という本来の目的がなくなっても、国府の仏事としては継続していたのである。また伯耆の四王寺山、長門の四王司山には中世以降、毘沙門堂が作られ、観音信仰と習合して福をもたらす毘沙門天信仰が展開していた。国家的、政治的に設置されたものだったとしても、それぞれの地域の中で人々の四天王信仰、毘沙門天信仰として独自の展開を遂げていったことがわかる。

(参考文献 大日方克己 2022A、鈴木靖民 2016、松江市 2015)

(11) 渤海と山陰地域—日本海を越えた交流—

◆日本・渤海交流の概観

9世紀を中心に、山陰地域には渤海使の来着が相次いだ。

渤海は、698年に高句麗遺民の大祚榮が北東アジアで自立政権を樹立したところからはじまる。713年に大祚榮は唐から渤海郡王とされ、渤海国が成立した。渤海使の来日は724年から919年まで、34回確認されている。

渤海使は来着すると、来着地か隣接する国に安置され、その国の財源から食料や必要物資、贈物などが支給された。その後、大使ら20人程度が入京して、天皇に国書・信物を奉呈して、各種朝廷行事や饗宴に参加し、渤海王宛の天皇の詔書（慰勞詔書）を授与され、出京する。大使一行が入京中も、他の随行者たちは安置された国でそのまま待機し、戻ってきた大使一行と合流して、風待ちの後、然るべき時に出航、帰国した。その間に、付随した交易や漢詩の交流なども行われた。

来着地をみると、8世紀は計14回のうち12回が蝦夷境・出羽・佐渡や北陸（能登・越前）の日本海側、1回が隠岐、1回が対馬である。9世紀には20回中、6回が北陸（能登・加賀・越前）、8回が山陰（隠岐・出雲・伯耆・但馬）、1回が長門、5回が不明である。8世紀には北陸以北の日本海沿岸地域、9世紀には北陸・山陰の西日本海沿岸地域と明確に変化している。新羅と関係が緊張していた8世紀は日本海横断ルート、関係が緩和した9世紀には日本海西部海域を南下するルートを取るようになったためだと考えられる。

使節の性格も、8世紀には東アジアの緊張関係から政治的・軍事的性格を帯びていた。9世紀に入ると関係も変化し、渤海使一行は国家的に編成された貿易団の性格を強めた。渤海王権は国内の在地支配層（首領）を同行させて利益を得させることで、彼らを支配下に

つなぎとめておこうとしたのである。

また 9 世紀に入ると、入京せず来着地から放還される例が増えてきた。770 年代から、来着した渤海使への対応が変わったためである。

日本律令国家は中華思想にもとづき渤海を朝貢する国として位置づけようとした。渤海も自国中心の中華思想を持っていた。そのため、渤海の国書は日本側にとって違礼だとされることがしばしばあり、問題も生じていた。770 年代以降、来着が報告されると政府は存問使を派遣し、来着地の国司とともに国書を開封し、その写しを太政官に送る。太政官ではそれを検討して入京の可否を決定する。入京が可となれば、派遣された領客使（存問使が兼任することも多い）に率いられて入京し、正式に国書と信物を天皇に奉呈した。入京が不可となれば、来着地・安置地から放還された。

来着した渤海使一行に要する費用、経済的負担の大きさも問題になった。京での接待費用だけでなく、来着から帰国まで半年ほど滞在する安置国の財政負担も大きかった。弘仁 5 年（914）9 月に出雲国に来着した王孝廉一行は、入京期間も含めて 8 か月近く出雲国に滞在した。その間、出雲国が負担した費用を大雑把に見積もると、年間の通常財源である正税の 2 割弱を占める。あくまでも法規定上の計算であり、実際に要した費用の史料は残っていないので不明ではあるが、相当な負担額になっていたと想像される。さらに安置された国から京までの路次諸国の負担—宿泊所、食料、馬、労働力などの提供も大きかった。

そのためもあって、天長年間（824～834）以降、日本側は一方的に一紀一貢（12 年に 1 回の来貢）を通告した。しかし渤海側は依然として度々使節団を派遣してきたため、前回から 12 年たっていない場合は放還するようになっていった。出雲国に来着した貞観 18 年（876）の楊中遠、寛平 4 年（892）の王亀謀らの放還はその例だった。

しかし放還は問答無用の門前払いではない。国書は返却されるが、その写しや太政官宛の渤海国中台省牒などは太政官に送られた。天皇が見ることもあった。中台省宛に太政官牒が送られることもあった。一定の文書外交は行われていたといえる。

また貞観 3 年（861）に出雲国に来着し放還された李居正は、仏書『加句靈驗仏頂尊勝陀羅尼記』をもたらし、その写本が石山寺に残っている。貞観元年（859）に能登国に来着し放還された烏孝慎は、唐の最新の暦、宣明暦をもたらした。宣明暦は貞観 4 年から日本の暦として採用され、江戸時代の貞享元年（1685）まで 800 年以上にわたって使われ続けた。

このように放還された渤海使からも重要な文物がもたらされている。交易も含めて来着・安置された地域を舞台に一定の外交と交流があった。等閑視してはいけないだろう。

◆ 出雲に来た渤海使王孝廉から地域の古代史を考える

隠岐・出雲・伯耆国に来着した渤海使の事例をすべて取り上げたいが、参考文献にあがった拙著を参照していただくとして、ここでは弘仁 5 年（814）9 月に来着した王孝廉から交流の実態を地域の歴史とあわせて考える。

王孝廉一行の足どりは次の通りである。

弘仁 5 年 9 月 30 日、出雲国に来着。大使王孝廉ほか 7 人以上が年末までに入京。翌 6 年正月 1 日、朝廷の元日朝賀に参列した。その後日に、天皇に国書を奉呈する儀があったはずだが、記録は残っていない。7 日には正月七日節（白馬節会）に参列し叙位された。16 日には正月十六日節（踏歌節会）に参列した。いずれも天皇が出御している。20 日には朝集堂で饗宴（天皇の出御なし）を受け、22 日に渤海王宛の勅書が伝達され出京した。その後出雲国にもどり、おそらく 5 月に出航したが、逆風に遭い遭難してしまう。越前国で船を建造して再度の帰国を待つ間、6 月に王孝廉は疱瘡で死去した。残された副使高景秀らが、再度嵯峨天皇からの勅書を託され帰国の途についたのは翌 7 年 5 月のことだった。

この間に王孝廉一行は日本側文人貴族たちと漢詩の交歓をしている。弘仁 9 年に嵯峨天皇の命で藤原冬嗣・滋野貞主らが編纂した漢詩集『文華秀麗集』のなかに合計 10 首収録されている。編者滋野貞主が王孝廉に送った詩も収録されている。これらの詩を分析することで、漢詩の交流が京だけではなく出雲でも行われていたことがわかる。

出雲で作ったことが確実なものは、王孝廉の「従出雲州書情、寄両箇勅使」（『文華秀麗集』贈答 41）。京での儀式を終えて出雲にもどり、帰国のための風待ちをしているときの詩で、帰郷領客使として京から付き添ってきた坂上今継らに贈ったもの。帰国を前にした心情を詠んでいる。

そのほかにも坂上今継の「和渤海大使見寄之作」（贈答 36）、王孝廉「在辺亭賦得山花、戲寄両箇領客使并滋三」（贈答 39）、「春日対雨、探得情字」（宴集 18）なども出雲での詩だとみられる。これらは出雲国府と推測される「辺庁」での宴、滞在地と推測される「辺亭」「賓亭」などを詠んでいる。出雲国府跡の政庁北の大舎原地区で検出された国司館とされている建物群は、9 世紀前半ころに瓦葺・礎石建物に建て替えられており、荘厳化されている。渤海使を意識した改作の可能性もあるかもしれない。

貞観 18 年（876）来着の楊中遠一行が出雲国島根郡に安置されていることからすれば、王孝廉の滞在地も同様に島根郡であろう。島根郡内では千酌駅家か島根郡家の可能性が考えられる。島根半島北岸で日本海に面した千酌駅家は、出雲国府から北上した官道（隠岐道）が海に突き当たる場所で、ここから隠岐に渡る。隠岐に来着した渤海使は出雲国に移されるので、ここに到着した可能性が高い。松江市修理田遺跡周辺が千酌駅家の候補地とされている。島根郡家は、松江市芝原遺跡が有力候補地であるが、最近それより南西の松江市坂本町あたりだとする説もだされている。いずれにせよ郡家には馬屋や厨、宿泊施設などが備えられており、滞在場所になりうる。100 人規模の使節団なので、分散滞在だった可能性もある。

漢詩の交流はこの後も渤海使と貴族たちの交流の中心になっていった。特に元慶 6 年（882）に加賀国、寛平 6 年（894）に伯耆国に来着した裴頌は菅原道真と交流し、『菅家文章』にはそのときの詩が多数収録されている。また道真死後、その子敦茂と、裴頌の子で渤海使としてたびたび来日した裴璆との父子二代にわたる交流もその後の伝説として語り

伝えられていく。

但馬国府跡とされる豊岡市の祢布が森遺跡からは、『詩経』など漢籍の一節を書いた木簡も発見されている。但馬国にも天長4年(827)に渤海使王文矩一行が来着し、放還されている。渤海使が来着する地域では、漢詩文の素養をもった貴族が国司に任命されたり、存問使として派遣されてきたりするので、地域の文化にも一定の影響を与えていることがわかる。

一般百姓にとってはどうだろうか。渤海使への供給負担の重さは先に取り上げた。それに加え、王孝廉を迎えた出雲国では、直前の弘仁4~5年に、東北地方から強制移住(移配)させられてきたエミシ(俘囚)の反乱がおこり、意宇・出雲・神門の出雲国主要3郡の正倉が焼失するという事態になっていた。直接被害を受けた百姓も少なくなかっただろう。こうしたなかでの王孝廉一行への供給である。出雲国の財政は破綻状態になった。その回復には相当な時間がかかっている。百姓の田租が免除されたといっても、その負担、労苦は大きかったはずである。

(参考文献 大日方克己 2019A、2022A、島根県古代文化センター2022)

(12) 中世の山陰と朝鮮はどのような交流があったか

—中世日本海交通の発展と倭寇、朝鮮—

926年、渤海は契丹(遼)に攻撃され滅亡した。契丹は、東丹国を設置して当初は渤海を継承しようとした。しかしすぐに西の遼陽に移転させた。東丹国とそれを支配する遼の視点が宋の方に向き、日本海側への関心が低下した。日本が929年に派遣されてきた東丹国使を拒絶したこともあって、日本海を横断した交流は一時断絶した。

しかし完全に断絶したわけではなかった。渤海故地日本海側の東女真が、海賊、略奪行為を伴いながら朝鮮半島東海岸を南下、11世紀初頭に北部九州を襲撃する刀伊の襲来もあった。山陰地域にも警戒態勢がとられ、日本海西部海域に緊張が走った。

東シナ海は10世紀以降も民間商人が活動する海域として展開していったが、そのなかで東シナ海、博多方面から日本海側、敦賀まで宋海商の活動が広がってきた。995年には宋海商朱仁聡・林庭幹らが敦賀に来航し、3年ほど滞在してその後大宰府に移っている。1060年にも宋海商林養が敦賀に来航し、その子林臯は但馬国に居住した。林臯は1071年に宋海商孫忠の船に乗り込んで、通訳として日本僧成尋とともに博多から渡宋している。博多・大宰府を結節点に日本海沿岸を活動し、ときには居住する宋海商の姿が垣間見えるのである。

中世の出雲でも宋人の姿がみえる。出雲市野石谷町の高野寺に伝わった大般若経599巻は宋人浄蓮が書写したものだった。もともと飯石郡須佐郷の東山十三所明神(出雲市の須佐神社)に納められていた。須佐郷は北条得宗家領で、その代官のもとで書写されたと推測されている。

中世には日本海沿岸や宍道湖・中海沿岸各地に港が成立し、日本海と中海・宍道湖が結びついた水上交通体系が展開した。このような水上交通、流通経済には国人領主層が積極的に関与していった。宋人淨蓮が日本海沿岸ルートで出雲に来たのかは不明であるが、中世日本海海運の発展が、博多や朝鮮半島との交通と連結して対外交流が活発になる条件を準備した。

14～16世紀、朝鮮・明との関係で深刻な問題が倭寇だった。前期倭寇で大きな被害を受けたのが朝鮮半島で、高麗王朝はたびたび日本に対して禁圧を求めた。最初が貞治5年(1366)のことで、金龍ら16人の使節団が出雲国杵築に来着した。さらに伯耆から京都へ向かい、倭寇対策を求めた(「報恩院文書」『大日本史料』第6編27巻貞治5年2月是月条)。

1392年、高麗に代って成立した朝鮮王朝は貿易統制による倭寇対策を取った。朝鮮国王が日本の特定領主に許可証として図書を与え公的な貿易を承認するとともに、倭寇と一体化していた非合法的な交易を抑え込もうとしたものである。

前期倭寇の根拠地は対馬だとみなされていたが、海賊の活動領域は山陰地域、特に石見や出雲にも及んでいた。漂流して雲州安来に居住しているものが70戸余、寇賊に略奪されて売りとばされ、日本各地に居る者は多数だという(『朝鮮王朝実録』世宗2年(1420)閏正月甲申(15日)条)。また対馬の宗盛弘配下の勢力が、朝鮮南部の全羅南道で略奪を行い石見で売買していた(同書成宗12年(1481)10月癸丑(12日)条)。出雲、石見、壱岐、松浦五島、平戸、その他多くの小島には海賊が多数いるという(同書成宗21年(1490)11月甲午(16日)条)。さらに石見の人が明の寧波で海賊行為をしていたという(同書明宗8年(1553)6月壬寅(27日)条)。海賊と結びついた石見の住人の活動が中国大陸にまで及んでいたのである。

朝鮮王朝の官人申叔舟が1471年に著した『海道諸国記』には、朝鮮と交易した山陰(丹後～長門)の領主が14名記されている。日本側の史料によって特定できない人物が多いのに、不正確な地名もあり、事実かどうか疑わしい。架空人物の名義で図書を入手し、貿易の利を得ようとした可能性も考えられている。

『海道諸国記』にはみえないが、石見長浜(浜田)の領主周布氏が朝鮮王朝との関係を持っていたことは確かである。それは応永32年(1425)に始まる。朝鮮の官船が暴風で漂流、36人が溺死し、張乙夫ら10人が石見長浜に漂着し、領主周布兼仲に保護されて1か月滞在した。その後対馬に護送され、丹木・朱紅・盤・胡椒などの進上品とともに、朝鮮に送還された(『朝鮮王朝実録』世宗7年(1425)12月癸巳(28日)条)。これに対して朝鮮国王が返礼の使者を派遣し、周布兼仲に紬・布類や虎皮・豹皮・人参・松実・清蜜・乾虎肉などの礼物を贈った(同書世宗8年(1426)2月丙子(12日)条)。周布兼仲はそれに対する返礼として、さらに朱椀・漉漆・蠟燭などを贈り、朝鮮もさらに布・満花席・虎皮・豹皮・人参・松実・焼酒などを贈った(同書同年11月丁巳(28日)条)。1447年には朝鮮国王から図書が周布氏に与えられ(同書世宗29年5月戊午(28)日条)、正式に交易が行

われていった。

『朝鮮王朝実録』によると、周布氏と朝鮮の通交は兼仲・兼貞・和兼 3 代 78 年間に 49 回に及んだ。交易品は、朝鮮からは絹・紬・綿布、花満席、虎皮・豹皮、人参・松実・清蜜などがもたらされ、周布氏からは、刀剣・朱椀・漉漆・蠟燭、丹木・胡椒などが送られた。朝鮮や石見の産物が中心であるが、注意されるのは丹木・胡椒という南海産の物品も含まれていることである。

最初の漂流民の送還が対馬経由であり、『朝鮮王朝実録』では周布氏と対馬からの来訪がともに記録されていることが多いことからすると、丹木・胡椒は対馬の宗氏を通じてか、博多で入手して朝鮮に贈ったことが想定される。対馬や博多には琉球など南方との交易でもたらされてきたものである。周布氏と朝鮮の通交は、西日本海を直接横断したものではなく、北部九州や対馬を経由したものだった。日本海沿岸交通（敦賀—山陰—北部九州）と博多・対馬—朝鮮、東シナ海というルートが結合して、山陰地域と朝鮮との交通が発展していったことがわかる。16 世紀には、石見の住人が明・寧波にまで進出しており、北部九州を介して東シナ海交通と結合して、大きな広がりを見せていったことになる。

（参考文献 青山公亮 1955、井上寛司 1991、同 2001、高橋公明 1991、鳥谷芳雄 2021、長谷川博史 2013、松江市 2016、松尾寿・田中義昭・渡辺貞幸・大日方克己・井上寛司・竹永三男 2005）

(13) 石見銀山は世界史の中でどのような位置にあるか—山陰から世界へ—

◆世界遺産「石見銀山とその文化的景観」

石見銀山は中世末期から近世初期が全盛で、近世中期以降は産出量が減少し衰退した。明治期に入っていったん休山した。1886 年、1941 年に再開が試みられたが、災害や不採算などで鉱山としての再開は断念され現在に至っている。

遺跡、文化財として位置づけられ世界遺産に指定されていく流れは、以下の通りである。

1967 年に島根県指定史跡、1969 年には国指定史跡になった。1987 年には大森銀山地区の町並み、2004 年には温泉津地区の町並みが、それぞれ重要伝統的建造物群保存地区に指定された。前後するが、2001 年には日本政府が石見銀山をユネスコに提出する「暫定リスト」に登録し、本格的に世界遺産登録をめざした。2006 年にはユネスコ世界遺産委員会に世界遺産推薦書を提出。2007 年にイコモスが「登録延期」を勧告したが、ユネスコの日本代表部は勧告に反論する膨大な補足情報を各国の大使や専門家に送り、説得する外交を展開、7 月の世界遺産委員会で逆転、登録が決定した。

◆石見銀山成立の背景としての世界史的動向

まず東アジア海域世界の拡大がある。東シナ海域では後期倭寇の活動が展開していたが、それには中国民間商人や海賊の参入があった。特に九州西部・五島列島と中国・舟山列島を結ぶ線はその活動の中心ラインとなっていた。活動領域は東シナ海から東南アジア海域

へと拡大していった。

そのころヨーロッパ諸国はアジアや南北アメリカ大陸への進出を始めていた。まずポルトガル人の動きが海域アジアに直接およんでくる。1498年にヴァスコ＝ダ＝ガマがアフリカ南端の喜望峰を廻ってインドのカリカット（コジコード）に到達した。インド洋はムスリム商人、インド商人の活動する世界だったが、そこにポルトガル人が参入した。さらに1510年にはポルトガルがゴアを占領した。翌年にはマラッカを占領し、南シナ海域の交易圏に参入、1513年には中国のマカオで交易を開始し、1557年にはマカオの永久居留権を得た。

ポルトガル人の活動は、東南アジア・東アジア海域に展開していた中国民間商人や後期倭寇などの活動と連動するもので、彼らとともに日本へもやってくる。1540年には中国民間商人が舟山諸島の双嶼（リャンポー）にポルトガル人を引き入れているが、この双嶼が彼らの根拠地であり、倭寇とも関係して日本との間を頻繁に往来していた。そして1543年、双嶼の王直がポルトガル人を乗せて種子島に来航したのである。

まさにこのタイミングで開発されたのが石見銀山だった。この石見銀山の成立が海域アジアに新しい展開をもたらしたとも考えられはじめている。

◆石見銀山の成立

16世紀前半の石見銀山成立については同時代史料がなく、江戸後期の文化13年(1816)に成立した大森代官所銀山方役人大賀吉茹の『銀山旧記』によるところが大きかった。伝説めいた話が多く信憑性に問題があるが、少なくとも大永6年(1526)に博多の神屋寿禎が主導して三島清右衛門とともに石見銀山を発見したとされてきた。

しかし近年、「石州仁万郡佐摩村銀山之初」(写本)の原本が、16世紀末までに成立したもので、16世紀の石見銀山の歴史的事実は、この史料をもとに論じていかなければならないとされるようになった。その内容から次のような成立の状況が考えられる。

大永7年(1527)3月23日に、出雲国田儀の三島清右衛門が、出雲国杵築の鷲銅山より大工を連れてきたのが石見銀山の始まりで、当初は銀鉱石を三島清右衛門と小田藤右衛門(神屋寿禎の代官)が買い取っていた。これらが朝鮮に搬出されていた。当時の日本には銀精錬技術が途絶えていたようである。小田藤右衛門は、大内氏が派遣した遣明船の船頭でもあり、銀鉱石は博多を拠点に搬出されていた。そして天文2年(1533)に石見銀山現地での銀精錬が開始され、以後、石見銀山から銀が海域アジアへと搬出されていった。

この天文2年からはじまった現地での精錬は、灰吹法という技術によると考えられている。鉛と銀鉱石を融解して含銀鉛を生成し、それを燃焼させてできた酸化鉛を灰の中に吸収させて、銀だけを残すというもの。これは正確には合せ吹法というべき技術で、中世ヨーロッパや中国の宋代、明代でも行われており、石見銀山へは明から導入されたという説も提唱されている。これまでは、神屋寿禎らにより朝鮮から導入されたと考えられていた。

◆世界の中の石見銀山

16世紀、スペインはラテン・アメリカで銀山の開発を進めていた。1521年までにはコル

テスがアステカを、1532年にピサロがインカを滅ぼし、スペインがそれらの地を支配するようになった。スペインは1545年にボリビアのポトシ銀山、1546年にメキシコのサカテラス銀山を発見し、開発を進めた。このラテン・アメリカの銀山では、石見銀山とは異なる水銀アマルガム法による精錬が行われた。スペインは1571年にはマニラを占領して、ここを拠点に東ユーラシア海域の貿易にも参入してきた。

石見銀山の銀は、中国民間商人やポルトガル人、倭人によって代価として中国へ大量にもたらされていった。明では銀に一本化する税制が採用され、また経済の拡大などにより銀需要が飛躍的に高まり、日本だけでなくスペインなどを通じたラテン・アメリカの銀も大量に流入していった。

このように石見銀山の成立と発展は、文字どおり世界史的な視野、グローバルな視野の中でみていくことができる。この授業の最後として、山陰地域から世界へという「グローバル」な素材として提示した。

(参考文献 井澤英二 2023、岡美穂子 2021、小葉田淳 1933、小林准士 2003、橋本雄・米谷均 2008、長谷川博史 2022、村井章介 1997)

(14) 『出雲国風土記』はどのように伝えられ、広まったか

—中世・近世の風土記、近代の国引神話、古代はどのように認識されたか—

最終回は余論、補論の性格としての位置づけで、取り上げきれなかったテーマを状況に応じて取り上げた。そのため年によってテーマ、内容は変わった。

最終2024年度は標記のテーマで、『出雲国風土記』の写本の流布、注解書の成立と流布などを通じて、風土記がどのように認識され、古代出雲像が形成されてきたのかを考えつつ、近代の教科書で国引神話がどのように描かれ、教えられていったのかをとりあげた。

1910年の韓国併合直後に出版された渋川玄耳『日本神典古事記晰』は、国引神話を韓国併合に重ね合わせ、さらに満洲の国引を示唆する話を付け加えている。これが中学校国語教科書に採用された。1930代からの小学校の国定国語教科書では日本の国土拡大の話に抽象化され、帝国日本の侵略の神話へと書き換えられ、子どもたちに教え込まれていった。

近世、近代にどのような古代像が描かれてきて、それが現在の歴史認識にどうつながってくるのか、近代日本のアジア侵略と神話、古代史像がどう関係するか、ひいては歴史とは何かという大きな問題を意識し、考えるための問題提起で最後を締めくくった。

(参考文献 大日方克己 2008、同 2010、同 2022B)

3. むすびにかえて

受講者は最大時250人超だったが、コロナ過で教室収容人数の半分にする事になったのを機に、130人に制限した。それでもこの人数では、アクティブ・ラーニングはほぼ不可能。事前および授業中の問いかけ、毎回の課題レポート提出と添削、評点、コメントの

フィードバックを中心とした。これらは e ラーニング・システムの Moodle を通じて行った。2022 年度ころから課題レポートに AI を使ったものが目立ち始めてきた。高等学校の探究型授業でも AI を使うところが増えていると聞く。今後、AI とどのように向き合い、どのように活用していくかが大きな課題になる。

本稿では方法論よりも授業内容の概説を中心に記述した。各回の方法論、基礎的知識については省略した部分が多く、また個々の根拠となる研究等は、逐一注記することをせず、最後に参考文献として一括してあげた。また隠岐に配流された後鳥羽、後醍醐、戦国大名尼子氏、あるいは初期荘園と高庭荘、中世荘園と東郷荘絵図などのテーマも、年度によっては取り上げたこともあったが、時間の制約と東アジア世界のなかで考えるという大きな課題との関係から、最終的には割愛せざるをえなかった。専門外の分野においては最新の研究にそぐわない部分も少なくないと思われる。あわせてご批判いただければ幸いである。

参考文献一覧

- 青山公亮 1955 『日鮮関係史の研究』 明治大学文学部文学研究所
- 井澤英二 2023 「石見銀山でいう「灰吹」とは「合せ吹」のことである」『石見銀山研究』3
- 石井進 1987 『鎌倉武士の実像』 平凡社
- 石野博信 1995 『全国古墳編年集成』 雄山閣
- 出雲弥生の森博物館 2013 『もう一つの出雲神話』
- 井上寛司 1991 「中世西日本海地域の水運と交流」『日本海と出雲世界』 小学館
- 井上寛司 2001 『中世の港町・浜田』 浜田市教育委員会
- 岡美穂子 2021 「グローバルな視点から見た南蛮貿易と石見銀山予稿」『石見銀山研究』 創刊準備号
- 岡田精司 1992 「出雲神話の神々」『新版古代の日本④中国・四国』 角川書店
- 大日方克己 2008 「江戸時代の出雲国風土記」『松江藩の時代』、山陰中央新報社
- 大日方克己 2010 「岸崎佐久次と『出雲風土記抄』」、『社会文化論集』6
- 大日方克己 2019A 『出雲に來た渤海人』 松江市歴史まちづくり部史料編纂課
- 大日方克己 2019B 「奈良・平安時代の遞送・供給—その展開と国家・地域社会」『日本古代の輸送と道路』 八木書店
- 大日方克己 2022A 『古代山陰と東アジア』 同成社
- 大日方克己 2022B 「近代教科書と再話される「国引神話」」『社会文化論集』18
- 勝部昭 2002 『出雲国風土記と古代遺跡』 山川出版社
- 菊地照夫 2016 『古代王権の宗教的世界と出雲』 同成社

- 小葉田淳 1933 「石見銀山—江戸時代初期にいたる—」『史林』18-1、後に『日本鉱山史の研究』岩波書店、1968
- 小林准士 2003 「解説—『銀山旧記』の成立事情」『石見銀山史料解題銀山旧記』島根県教育庁文化財課
- 斎藤英喜 2012 『あらぶるスサノオ、七変化—〈中世神話〉の世界—』吉川弘文館
- 佐伯徳哉 2014 『中世出雲と国家的支配』法蔵館
- 佐伯徳哉 2017 『出雲の中世』吉川弘文館
- 佐々木恵介 2004 『受領と地方社会』山川出版社
- 島根県古代文化センター2022 『山陰における古代交通の研究』
- 島根県古代文化センター2023 『出雲国風土記—校訂・注釈編—』八木書店
- 鈴木靖民 2016 『古代日本の東アジア交流史』勉誠出版
- 大社町 1991 『大社町史 上巻』
- 大山町教育委員会 2011 『大山僧房跡調査報告書』
- 高橋公明 1991 「中世西日本海域と対外交流」『日本海と出雲世界』小学館
- 高橋昌明 2004 『増補改訂 清盛以前—伊勢平氏の興隆』文理閣
- 武廣亮平 2024 「東西出雲論と出雲国造の成立」『古代出雲の氏族と社会』同成社、2024、初出 2009 年
- 田村亨 2024 「鎌倉前中期の造営遷宮と幕府—杵築大社を中心に—」『島根県古代文化センター研究論集 伊勢と出雲』
- 鳥取県立博物館 2018 『大いなる神仏の山大山』
- 鳥谷芳雄 2021 「大般若経のある風景」『歴史の風景を読む』報光社
- 中込律子 2013 『平安時代の税財政構造と受領』校倉書房
- 西岡和彦 2004 『近世出雲大社の基礎的研究』原書房
- 橋本雄・米谷均 2008 「倭寇論のゆくえ」『海域アジア史研究入門』
- 長谷川博史 2013 『中世水運と松江—城下町形成の前史を探る—』松江市教育委員会
- 長谷川博史 2022 「石見銀山と大内氏」『石見銀山研究』2
- 浮浪山鱒淵寺 1997 『出雲国浮浪山鱒淵寺』
- 松江市 2015 『松江市史通史編 1 自然環境・原始・古代』
- 松江市 2016 『松江市史通史編 2 中世』
- 松尾寿・田中義昭・渡辺貞幸・大日方克己・井上寛司・竹永三男 2005 『島根県の歴史』山川出版社
- 村井章介 1997 『国境を超えて—東アジア海域世界の中世—』校倉書房
- 森公章 2016 『平安時代の国司の赴任—『時範記』をよむ』臨川書店
- 米子市 2003 『新修米子市史 1 通史編 原始・古代・中世』